

なからぎ

189号

2009年10月

ベーシック・インカムと2人のカール

公共政策学部長 小沢修司

図書館報には部局長の文章がローテーションで載ることになっている。前回は、2007年10月(181号)だった。『『資本論』の発達論読み』と題したその文章の最後に『『すべての人に所得の保障を』という一見不可解なベーシック・インカム(以下、BIと記す)の主張』は「これから多くの関心を集める」と書いた。それが現実のものとなってきている。

今回の総選挙では、田中康夫氏率いる新党日本のマニフェストにBIの実現が掲げられていた。政権を担うことになった民主党のマニフェストには、所得制限なしに15歳以下の全ての子どもに月額2万6,000円を支給する子ども手当の創設が掲げられている。子ども手当はBIの子ども版である。全額税方式の基礎年金が実現すれば、それはBIの高齢者版となる。税制の分野で実現するであろう「給付付き税額控除」制度はBIへ向けての一里塚となる。先日の朝日新聞(9月12日付け朝刊、be紙面)でもBIが取り上げられ、私への取材に概ねもつづいた記事が掲載された。

BIの主張は、働いても働かなくても人間の生活に必要な所得を無条件に一律支給する、というものである。この主張は、一見して社会主義的であるかに見えて、朝日新聞を見られた方はお分かりのようにヴェルナー(ドイツ)など経営者や新自由主義的立場の経済学者も賛同するように、資本主義とも親和的な特徴を有している。訳が分からない……のではなく、資本主義社会における生活の営みを考察してみれば、その意味が見えてくる。

大学生の諸君にとって、シュウカツ(就職活動)は当たり前であろう。それは、就職する、つまり労働力を販売することでしか生活の糧が得られないからである。しかしながら、このような「労働力の商品化」が「当たり前」の社会(=資本主義社会)は、人間社会にとって僅か200年前後の浅い歴史があるにすぎない。

資本主義社会の成立と「労働力商品」の登場の意味について、ワクワクしながら学ぶことができるのは、前回も書いたカール・マルクスの『資本論』と、カール・ポラニーの『大転換——市場社会の形成と崩壊——』(吉沢英成ほか訳、東洋経済新報社)である。思想的立場は全く異なり、前者が書かれたのは1867年(第1巻)、後者は1944年と時代も異なる。そして、今は21世紀。

労働力が商品化される資本主義社会におけるBIの立ち位置を考えると「訳が分からない」BIも訳が分かるようになる……2人のカールとの格闘が続く。

(おざわ しゅうじ：公共政策学部教授)

御紹介のカール・ポラニーの著書については、『[新訳]大転換：市場社会の形成と崩壊』野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社、2009.7刊(請求番号 332.06 || P)を2階閲覧室入口の新着図書コーナーに配架していますので、御利用ください。また、ヴェルナーについては、ゲッツ・W・ヴェルナー「ベーシック・インカム～基本所得のある社会へ～」渡辺一男訳、小沢修司解題、現代書館、2007.11刊及び「すべての人にベーシック・インカムを～基本的人権としての所得保障について～」渡辺一男訳、現代書館、2009.4刊(両書とも請求番号 364 || W)を紹介されていますので、あわせて御利用ください。

専門書のもうひとつの魅力

図書館運営委員 三好岩生

子供の頃から本は好きでした。小説、随筆、科学書、雑誌等々、様々な分野の活字に触れ、知らない世界に出会い、想像をめぐらせて楽しんできました。しかし、最近は楽しみとして本を読むことが少なくなり、どちらかという必要にせまられて読むことが多くなっています。読む本のほとんどが専門書、あるいは専門に関係する分野の書籍となり、多少“しんどい”思いをしながら、感性よりも理性を働かせて情報を拾い集めているのです。

そんな中、専門書でありながら読むほどに熱中するような一冊の本と最近出会いました。亀田弘行監修「総合防災学への道」です。この本は、主に地震等の災害に対する防災システムについて書かれたものです。読者として想定されているのは、防災研究やその実践に携わる研究者、学生や実務家などの専門家あるいはそれに近い立場の人であり、その意味ではバリバリの専門書です。内容は、大きなプロジェクト研究の成果が基礎となっています。多数からなる著者陣には、大学や企業の研究所に所属する研究者に加えて大学院生も名を連ね、それぞれの専門分野において最新の研究成果を踏まえた論述を展開しています。このように書くと、プロジェクト研究の成果を寄せ集めてそのまま出版してしまう、いわゆる“記念碑的専門書”のように思われるかもしれませんが。しかし一読すると、この本が“記念碑的専門書”とは全く違うものであることがわかります。その違いを一言で言うならば、“一貫した哲学がある”ということだと思えます。

「総合防災学への道」は600ページ近い分

厚い本ですが、その全編に一貫して流れる哲学が、50ページにも満たない第1章で語られます。その哲学の説明として、著者はまず都市や地域を“生命体システム”に見立てます。都市や地域は、それ自体が緊張したり（災害時やお祭りのときなど）弛緩したり（静穏時）しながら長期的には成長したり衰退したりするものであり、その点において生命体とみなすことができるとしているのです。即ち、防災とはこのような生命維持能力を持った生命体システムに擬えた都市や地域を丸ごと守り、育てることであると考えているのです。私も防災学を専門としています。対象は都市ではなく、山間地であることが多いのですが、そこでの防災システムもまた生命体に例えられると考えています。山間地の集落では、昔から森林や農地、河川などの地域の自然資源を効率的に利用する中で独自の文化を形成してきました。いわゆる里山の文化的景観の形成です。一方で、土砂災害などの幾多の自然災害を経験してきました。自然の中での暮らしは災害との闘いの歴史でもあったわけです。従来、山間地に暮らす人々は山や川と日常的に接することにより、多くの資源を得ると同時に災害から身を守る術を経験的に身につけていました。しかし、ここ数十年の間に自然資源の利用は急激に減少し、経験的に積み重ねてきた防災術も失われつつあります。このような中、現代的な地域防災システムを構築するためには、地域に暮らす人々が日常的に山や川と接しながら、災害の危険性を知り、災害とうまくつきあっていくことが重要と考えています。地域という生命体システムが、

緊張と弛緩を繰り返しながら学習していくわけです。このように都市や地域を生命体と見立てることは、旧来の防災学の枠組みから考えると、全く突拍子も無い比喻であり、その抽象的な表現に戸惑いを覚える人もいることでしょう。しかし、「総合防災学への道」では、一見抽象的で非現実的にさえ見える比喻が、現実的な問題解決法と見事に対応しており、それらの問題解決法同士の関係をうまく整理して表現する手法であることが説明されます。逆に、旧来の細分化された防災学には“各々が切れ切れの細路を進んでいくなかで、ついでに袋小路に突き当たっているかのよう”であるとして発想の転換が求められます。しかしそこでの主張は、専門化・高度化された科学の進歩を決して否定するものではないでしょう。現に、第2章以降には高度に専門的な各論的話題が続きます。しかも、その題材は実に多様であり基礎となる学問体系も様々です。にもかかわらず、順番に見ていくと、決してバラバラな感じを受けないのです。つまり、多様な専門性を横断的に関係付ける概念モデルが最初に提示されることによって、各論的部分は互いに連携しながらも却って自由に、いきいきとその専門性を発揮しているように見えるのです。最初に提示された概念モデルがあるからこそ、各論における認識の方向性がある程度予見され、読み進める中で読者に安心感を与えてくれます。新しい概念の提示を受けて、各論が自由に振舞いながらも横断的なまとまりを示す姿には、調和した美しささえ感じます。これが専門書のもうひとつの魅力というわけです。

私が学生だった頃、いくつかの教科書にある種の美しさ、落ち着きの良さのようなものを感じることがありました。それは、完成した学問体系を見事に整理し尽くした様式美の

ようなものです。これは専門書が本来的に持っていた魅力だと思います。考えてみれば、一昔前の教科書には初版が発行されてから、10年、20年と版を重ねて、その完成度を増していくものが多くありました。もちろん今でもそのような名著とすべき専門書はありますが、その登場機会は減少しているように思います。大学で用意される講義の名前を見ると、伝統的な名前の講義が無くなり、以前には見かけなかった長い名前の講義が増えました。研究についても同様で、いわゆる学際的、複合的な分野の課題を、複数の異なった分野の専門家が分担し、最後にそれを集めて成果とすることが多くなりました。集めた成果が出版されることもありますが、それが魅力的なまとまりのある本になるか否かは、各論を一貫して底支えする哲学があるか否かにかかっているように思います。私たち研究者は、とくにプロジェクト研究を進める際には、研究の枠組み全体を貫く哲学を、以前にも増して真摯に追求すべきなのでしょう。読者の側に立ってみるならば、プロジェクトとりまとめ型の専門書の中で、なかなか面白い本に出会えないというのが正直な気持ちです。専門書であるからには必ずしも面白い必要があるわけではないのですが、やはり読者の関心・興味を引き付ける本には、記述内容以上の価値を感じます。そのような本の魅力に触れることによって、益々新しい知識への欲求が高まり、次の本へと手が伸びるのではないのでしょうか。

今回、幸いにして新しい魅力を感じさせる専門書と出会うことができ、専門書の新しい可能性を感じました。私もいつかは多くの読者に魅力を感じてもらえるような専門書作りに参加したいと、そう願っています。

(みよし いわお：生命環境科学研究科助教)

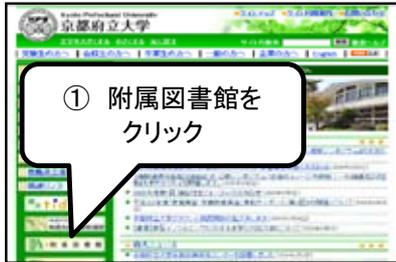
(御紹介の「総合防災学への道」萩原良巳・岡田憲夫・多々納裕一編著、京都大学学術出版会、2006.3刊(請求番号 519.9 || H)は、2階閲覧室入口の新着図書コーナーに配架していますので、御利用ください。)

マイライブラリを使いこなそう!

4月に更新した図書館システムには、マイライブラリというページがあります。お気づきでしたか?

以前はインターネット経由でできたのは資料の検索と予約、文献複写依頼だけでしたが、その他にも便利な機能がたくさん加わりました。

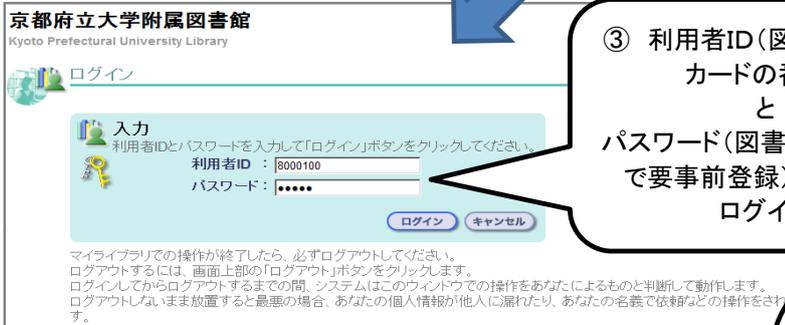
どんどん活用して、かしこく図書館を利用してください。



① 附属図書館を
クリッ



② マイライブラリ



③ 利用者ID(図書館利用者
カードの番号)
と
パスワード(図書館カウン
ターで要事前登録)を入力し、
ログイン

マイライブラリでの操作が終了したら、必ずログアウトしてください。ログアウトするには、画面上部の「ログアウト」ボタンをクリックします。ログインしてからログアウトするまでの間、システムはこのウィンドウでの操作をあなたによるものと判断して動作します。ログアウトしないまま放置すると最悪の場合、あなたの個人情報(他人)に漏れたり、あなたの名義で依頼などの操作をされます。

注意事項

・パスワード申込当日の利用はできません。翌日以降(申込の時間帯によってはそれ以降)ご利用ください

・システムの夜間処理の関係で、毎日深夜0時ごろ数時間はログインできません。

・インターネットの接続状態でログインできない時は、時間を置いてから再度ログインしてください。

・その他わからないことは図書館2階カウンターでお聞きください。



【お知らせ】

図書館からの連絡が表示されます。予約した図書が返却された、学外へ取寄の申込をした図書や論文が到着したら、ここに表示されます。

【新着情報】

事前に条件を指定しておけば、それに合う資料が新しく図書館に入った時、その情報が表示されます。

【入手待ちの資料】

予約中の図書、学外へ取寄依頼をしている図書・論文の情報や現在の状態が表示されます。

【借用中の資料】

現在借りている本の返却期限がわかります。ここから、返却期限の延長をすることもできます(ただし、返却期限内で1回のみ。夏休み等の長期貸出の資料の延長不可)

【マイフォルダ】

検索結果の保存などができます。

操作メニュー

【文献の複写】【資料の借用】

本学にない論文や本の取寄の依頼ができます。料金は有料(公費での取寄は、学生の場合、事前に担当教員の要承諾)。

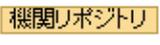
【設定変更】

マイライブラリへログインするためのパスワードや連絡用メールアドレスの変更をすることができます。

CiNii がさらに便利になりました。

(国立情報学研究所の論文情報ナビゲーター／どんな雑誌に自分が探している論文が載っているかを調べる時に利用します。)

今までから全文にアクセスできるものには   という表示があります。

4月から、それに加え、学術機関リポジトリJAIRO(呼称:ジャイロ/Japanese Institutional Repositories Online の略)の情報も表示されるようになりました。学術機関リポジトリの情報から全文へアクセスできるものには  

という表示があります。クリックすると、各大学のページへリンクします。



※学術機関リポジトリとは

各大学で蓄積した教育研究活動の成果を、管理、発信するためのシステムのこと。

インターネット上で世界中へ自らの研究成果を発信できることから、近年多くの大学で取り組まれています。

検索結果にアイコンが出れば、クリックしてみましょう。多くが無料で全文表示されます。学協会誌など有料のものもありますが、いきなり課金されませんので、大丈夫です。



注目!

データベースの トライアルを実施します!

期間 2009年10月1日(木)~11月30日(月)



さまざまな専門分野の専門誌約50誌の記事や論文を収録。キーワード等で検索し、全文を読むことができます。

勉強や研究はもちろん、就職活動のための企業情報の収集やPCスキルの向上にも活用できます。



昭和戦前紙面データベースのトライアルです。

現在利用できるのは、1945年以降の内容ですので、合わせて利用することにより、新聞記事検索がさらに効率よく行えます。

※詳細は図書館HPをご覧ください。

前号巻頭言において上田文学部長が紹介された原田種成著「貞観政要の研究」吉川弘文館1965年刊が入手できました。2階閲覧室入口の新书推荐コーナーに配架しましたので、御利用ください(請求記号 222.048 || H)。

平成21年度蔵書整理報告

8月12日(水)～31日(月)の間、2階閲覧室を休室して蔵書点検を実施しました。同時に、図書の出し入れがしにくかった箇所の手直しもおこないました。

今年もアルバイトの学生さんに手伝っていただき、旧型のバーコードリーダーを再活用できたこともあって、昨年より約25,000冊多い111,635冊点検することができました。

点検の結果、残念なことに不明図書が昨年に比べ、増加しています。

(21年度 58冊 閲覧室-47冊 書庫-11冊、20年度 28冊 閲覧室-24冊 書庫-4冊)

「京都」に関する図書が多数行方不明になっています。

'09オープンキャンパス開催される

7月25日(土)、26日(日)の両日、オープンキャンパスが開催されました。図書館も開館し、多くの方に見学していただきました。

全体の参加者は、高校生458人、保護者176人、計634人で、昨年の計663人と比較して少し減少しました。初日の悪天候の影響があったのではないかと思います。また、例年の傾向ですが、今年も文系学部希望の高校生の見学が自然科学系に比較してはるかに多かったのが特徴でした。

ところで、今回のオープンキャンパス参加者に対して実施されたアンケート調査結果を見ていて、「図書館が充実していたのでよい学校だと思いました」という意見を見出したときは、とてもうれしく思いました。このような感想を1人でも多くの参加者からいただけるよう、今後とも努力してまいりたいと考えております。

カレンダー

2009年10月							2009年11月							2009年12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7			1	2	3	4	5
4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12
11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
25	26	27	28	29	30	31	29	30						27	28	29	30	31		
★10/1(木)～ 後期授業スタート 通常開館 9:00～21:00 通常貸出 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)							★11/2(月)、4(水)、6(金)～30(月) 通常貸出 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)							★12/1(火)～25(金) 通常開館 9:00～21:00 通常貸出 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)						
★10/8(木) 夏休み貸出返却期限							★11/3(火)休館 文化の日 ★11/5(木)休館 創立記念日 ★11/13(金) 六公立総合競技会のため、16:45閉館							★12/14(月) 冬休み貸出 実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限 1/19(火))						
★10/12(月)休館 体育の日							★11/23(月)休館 勤労感謝の日							★12/23(水)休館 天皇誕生日 ★12/26(土)～1/4(月) 年末年始休館						
開 館 時 間 等																				
下記以外の10/1(木)～12/25(金) 通常開館														9:00 ～ 21:00						
11/13(金) 六公立総合競技会														9:00 ～ 16:45						
休 館 日														土・日・祝 創立記念日11/5(木) 年末年始(12/26(土)～1/4(月))						